



平成24年度
「体験型海外教育実地研究」
参加者による開発教材集

平成 25 年 2 月

広島大学大学院教育学研究科
広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター

目 次

1. 第3学年 異文化理解 Let's enjoy UCHIWA!
教育学研究科科学習科学専攻カリキュラム開発専修 佛崎はる菜 …… 1
2. 第4学年 社会科 Simpson's family and Isono's family
教育学研究科科学習科学専攻カリキュラム開発専修 横井 涼也 …… 7
3. 第5学年 異文化理解 Let's compare Japanese Heroes and American Heroes
教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修 瀬戸 康輝 …… 13
4. 第5学年 社会科 Let's study from money!
教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修 森 玲薫 …… 19
5. 第6学年 異文化理解 Let's write our first name in KATAKANA
教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修 西村祥太郎 …… 25
6. 第8学年 異文化理解 Let's compare American and Japanese Events
教育学研究科言語文化教育学専攻英語文化教育学専修 北村真理子 …… 31

※教科等名は、参加者（授業者）側から付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである（一部を除く）。

体験型海外教育実地研究 第3学年 異文化理解

「Let's enjoy UCHIWA!」

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 佛崎 はる 菜

1 はじめに

私が、体験型海外実地研究に参加した理由は、海外での教育に興味があったからである。学部時に小原友行教授の授業を受講した際、このプログラムの様子を写真と共に説明を聞くことができた。それを見たときに、海外の学校で実際に授業を行えることや、学校視察をすることができることにとても興味を引かれた。

大学院に入学してから、このプログラムの説明を再び聞き、海外の学校で実際に授業を行えることは、とても貴重な経験となる事を再認識した。そのため、この機会に参加することを決めた。

2 実地研究の日程と概要

| 月日 | 曜 | 交通等 | 訪問地・用務等 | 宿泊地 |
|------|---|--|---|--|
| 4/26 | 木 | 渡航までの日程確認 パスポート確認 ESTA・保険の確認 授業研究テーマの設定方法 | | |
| 5/18 | 金 | 授業研究テーマ案の交流 | | |
| 6/7 | 木 | 学習指導案の検討 | | |
| 7/2 | 月 | 学習指導案（英語版）の検討 | | |
| 7/8 | 日 | 学習指導案の検討および教材・教具の作成（渡航のための諸手続き） | | |
| 8/2 | 木 | 保険説明 学習指導案の検討および提出について | | |
| 8/30 | 木 | 指導案・授業の準備状況確認 報告書・教材集原稿および発表会について 渡航関係書類一式配布 渡航準備 書類（事務提出書類）提出 | | |
| 9/11 | 火 | 直前打ち合わせ | | |
| 9/15 | 土 | 広島→成田 0745-0925 (NH3112) 成田→ワシントンダラス 1105-1040 (NH2) ワシントンダラス→ローリー 1245-1347 (NH7144) 空港→ホテル サンドラ先生とジュリーさん（ECU 大学院）による送迎 | | City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 Tel:877-271-2616 |
| 9/16 | 日 | ホテル→パトリアルカ先生の家 （サンドラ先生による送迎） | ミーティング、ホテルにて教材作り 各学校の先生方と事前打ち合わせ レセプションパーティ | Greenville 同上 |
| 9/17 | 月 | ホテル→ウォールコート小学校 （サンドラ先生による送迎） | 学校訪問（ウォールコート小学校見学） 校内見学、授業見学 担任の先生と授業についての打ち合わせ レッドフォードさん宅での夕食 | Greenville 同上 |
| 9/18 | 火 | City Hotel →ウォ | 学校訪問（ウォールコート小学校） | Greenville 同上 |

| | | | | |
|--------------|--------|---|---|---|
| | | ールコート小学校へ ECU 大学訪問 (サンドラ先生による送迎) | 授業実践 授業参観 校内見学, 授業見学 午後イーストカロライナ大学訪問 リソースセンターの見学 大学院の授業への参加 ECU でのレセプションパーティー | |
| 9/19 | 水 | City Hotel →セントピーターズカトリックスクールへ (サンドラ先生による送迎) St.Peter's Catholic School → ローリー (タクシー) | 学校訪問 (St. Peter's Catholic School) 校内見学, 授業見学 午後 ローリーへ移動 ノースカロライナ州議事堂と自然史博物館を見学する。 | Clarion State Capital 320 Hillsborough St. Raleigh, NC <u>Tel:919-832-0501</u> Fax:919-833-1631 |
| 9/20 | 木 | 徒歩で, エクスプロリスミドルスクールへ | 学校訪問 * Exploris M.S. (6-8) ローリー市内観光 | Raleigh (同上) |
| 9/21 | 金 | ローリーーワシントンダラス空港 1025-1130 (NH-7145) (空港からホテルまでタクシー) | ワシントンへ移動 アメリカ文化体験 | Washington Plaza 10 Thomas Circle, N.W. Washington, DC 20005 202.842.1300 / 800.424.1140 Fax: 202.371.9602 Washington DC |
| 9/22 | 土 | 徒歩 | アメリカ文化体験 スミソニアン博物館 | Washington DC(同上) |
| 9/23 9/24 | 日 月 | ワシントンダラスー成田 1220-1525 (NH1) 成田ー広島 1745-1905 | | |

3 実地研究授業

3.1 単元名 第3学年 異文化交流「Let's enjoy UCHIWA!」

3.2 事前準備

① 単元設定の理由

単元設定の理由の一つは、日本の独特の文化であることである。うちわは、世界各国で使われているものではなく、日本を初め中国などアジア圏で多く使われている。また、うちわは夏に使われており、涼むための用途以外にも夏祭りでの風物や企業の広告等にも使われている。そのため、うちわを教材として使うことで、日本の文化を理解することができると共に、うちわを通して日本とアメリカの子どもたちが交流することができるのではないかと考え、この単元を設定した。

② 準備したこと

事前に、日本の子どもたち（三ツ城小学校放課後子ども教室「工作」教室）にうちわの片面に夏休みの思い出をテーマにして絵を描いてもらった。枚数は33枚を用意した。また、授業の流れを記した掲示物・日本で使われている様子が分かる写真を準備した。

教材としては、アメリカの小学校にないことを考え、マジック、ボンド、装飾品もそれぞれを用意した。

3.3 学習指導案

Lesson Title: Let's enjoy UCHIWA! (It's Japanese traditional tool. It is used when we want to cool down our body in summer. It is also used as fashion in summer festival and advertisement of merchandise.)

Lesson Author: Haruna Butsusaki

Date: September 17th 18th, 2012

Grade I would like to teach: 3th grade

Subject: Culture

Description: In this class, students will learn Japanese culture and living in summer through learning the use of UCHIWA. And they will notice the difference between the summer of JAPAN and USA by looking at the pictures drawn on UCHIWA by Japanese children.

Objectives: As the result of the activity, students will be able to

1. Know about Japanese culture and living in summer.
2. Learn the difference between summer of Japan and that of USA.

Materials, Resources and technology: UCHIWA, Some kit of handmade UCHIWA, Marker, Ornament, Camera

Procedure:

| Activity | Instruction of teacher | Materials |
|--|--|---|
| 1 Learn about the use of UCHIWA. | 1 Show a UCHIWA, explain the use of UCHIWA. | • Picture of the scene of using UCHIWA. |
| 2 Pay attention to what is drawn on the UCHIWA and exchange student's ideas. | 2 Explain what is drawn on UCHIWA, for example "summer" "advertising". | • Japanese UCHIWA per hand. |
| 3 Draw a picture on the UCHIWA. | 3 Give the children three themes (1.portrait 2.my summer vacation 3.name) and ask children what they want to draw on the UCHIWA. | • Some markers • Some ornaments • A kit of handmade |

| | | |
|---|---|---|
| <p>4 Exchange what they drew on the UCHIWA.</p> | <p>Show the sample of UCHIWA drawn by teacher.</p> <p>4 Tell children to talk with their friends. Talk with children about what they drew.</p> <ul style="list-style-type: none"> • picnic • ride a bike • swimming | <p>UCHIWA per hand.</p> <ul style="list-style-type: none"> • A Sample of UCHIWA. • UCHIWA drawn by Japanese children. |
| <p>5 Compare UCHIWA drawn by Japanese with those by children of USA.</p> | <p>5 Show the UCHIWA drawn by Japanese children. And, explain what is drawn on UCHIWA. Ask question to children if they can find any common points and different points.</p> <ul style="list-style-type: none"> • enjoy in summer vacation(common point) • how to spend in summer vacation(different point) | <ul style="list-style-type: none"> • Camera. |
| <p>6 Understand culture and use of UCHIWA and difference between summer of JAPAN and that of USA.</p> | <p>6 Tell about Japanese culture and living through the use of UCHIWA again and difference between summer of Japan and that of USA.</p> <ul style="list-style-type: none"> • common point in enjoying summer. • difference of how to spend in summer. | |

3.4 授業の実際

- (1) 浴衣を着て登場し、自己紹介を行った。自己紹介の中で、浴衣とうちわについても同時に紹介を行った。その後、「うちわ」に関するクイズを2問行った。1問目は「うちわ」の名前についてであり、2問目は「うちわ」の使い方についてのクイズを行った。クイズ形式にしたことで、子どもたちも興味を持って参加している様子だった。
- (2) うちわの制作を行った。まずは、自分自身の制作したうちわを提示し、夏の思い出を描いたことを伝えた。その後、どんな夏休みを過ごしたのかを問い、同じように「うちわ」に絵を描くように指示をした。制作過程としては、白紙のシートを配りそこにそれぞれの夏休みの思い出を描くようにした。白紙のシートに絵を描く範囲があったが、説明不足のために、範囲をはみ出して描いている児童も見られた。
- (3) 最後に、日本の子どもたちが描いたうちわを提示した。その後、もう片面に授業で描いたうちわを貼り完成させた。児童は、日本の子どもたちが描いたものにも興味を示して



おり、「『KENTA』は何を示すのか。」と尋ね、名前を表していることを伝えると、自分自身の名前もうちわに書いている児童もいた。



3.5 考察

授業を終えた結果、2点の成果と3点の課題を見出すことができた。

まず、成果としては、以下の2点である。

- 子どもたちの興味・関心を持たせることができた。
- 子どもたちとコミュニケーションを取ることができた。

浴衣を着て登場したり、「うちわ」のクイズを行うことで、子どもたちの日本やうちわへの興味・関心を引くことができたと思う。また、英語は話せないが積極的に子どもたちの活動の様子を見て回り、話を聞いたり、「good!」など褒めたりコミュニケーションを取ろうとする姿勢で臨むことができたと考える。

次に、課題としては以下の3点を挙げる。

- 英語力の低さから、子どもたちからの質問にすぐに対応することができなかった。
- 活動の順番などを具体的に示した教具が準備されていなかった。
- 最後に伝えたいことを伝えることができなかった。

活動中には、子ども達から質問が出された。しかしながら、自身の英語力の低さから質問を聞きとることができなかった。また、授業の順序を示した教具は準備していたが、活動の順番の順序を示した教具を準備していなかった。これらのことが授業をスムーズに行うことができなかった要因だと考える。また、その結果時間が無くなってしまい、最後に伝えたいことを伝えることができなかったことが大きな課題として挙げられるだろう。

4 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

この実地研究を通して、一番の変容となったのは、授業観である。今回、私は英語が未熟なまま授業に臨むこととなった。おそらく聞きとりにくい言語を話す私に対して、クラスの子どもたちの真剣に耳を傾け理解しようとする姿勢を感じ取ることができた。このことから、私は、授業を受ける子どもたちがいてこそ私は授業ができ、先生になれるのだということを実感した。もし、同じように授業をする準備をして臨んでも、子どもたちの方向が向かなければ私は授業をすることもままならなかつただろう。また、アメリカでの子どもたちや先生方の支えを初め、日本でも同じように支えてくださった方々の上に、私の授業は成り立っているのだと考えさせられた。日本にいと、子どもたちがこちらを向き授業をするのが当然のことと考えてしまいがちであるが、実地研究において、それが当然のことではなくとても感謝しなければ

ならないことであることに気が付いた。

4.2 自分自身についての変容

自分自身の変容としては、積極的に態度で示すことが重要であると考えようになったことである。この体験型教育実地研修の中では、英語で自分の思いを伝えるべき場面が多々あった。英語が未熟であることに恥じらいを覚え、初めは自分から英語を話すことをためらっていた。しかしながら、自分の思いは自分でしか伝えられないため、少しずつではあるが英語で「話す」ように心がけていった。授業と同じように、アメリカでの先生方も理解しようと耳を傾けてくれる姿に感謝すると共に、少しでも通じたときはとてもうれしい気持ちになった。確かに、表情やジェスチャーなどの部分でのコミュニケーションも重要である。しかしそれと同時に「言葉」によるコミュニケーションも大切であることを再認識した。ノンバーバルな部分とバーバルな部分の両輪を以て、態度で示していくことが一番のコミュニケーションになるのではないかと考えた。

4.3 グローバルマインドに関する変容

まず、生活の中で英語を使う機会がほとんどなかったため、英語の必要性を感じていなかった。しかし、この体験型教育実地研修を通して、これからの時代に英語を話すことができるようになることは重要であると感じた。それはやはり、いろいろな人と考えを交流するためには、言葉の面が大きいと実感したからである。今回訪問校の校長先生などを招いた食事会等で、教育に関する話題になることがあった。そのとき、日本語では考えをまとめられていても、英語では上手く伝えられないもどかしさを感じた。英語を話すことができれば、さらに多くの人と考えを交流することができる点でも今後英語を上達していきたいと考える。

また、日本では当たり前なのが海外では当たり前ではないことも実感した。それは、学校訪問一つとっても、学級の中でお菓子が食べられていた。これは、日本では校則で禁止されている所も多いだろう。しかし、正誤や優劣ではなく、独自の文化によってそれらがなされているのであり、かたくなに拒むことは望ましくないと考える。グローバルな視点に立ったとき、見習うべき点を自国の文化に適応させながら、柔軟に取り入れながら、相互に成長していくこそが、今後求められていくのではないだろうかと思った。

5 おわりに

今回は、本当に充実した実地研修となったと考える。初めてのアメリカの中で、授業もするなど緊張もあった。しかしながら、アメリカの先生方を初め大学の先生方のサポートのおかげで、安心して10日間を過ごすことができたと思う。この体験型実地研修に参加しなければ、出会えなかった人や、見ることができなかった景色、考えなかったことなどたくさんある。自分自身を見つめ直し、課題を発見することもできた。今回で終わりではなく、この実地研修を糧に、教職に就いてからもグローバルマインドを持って教育に携わっていきたいと考える。

最後に、この場を借りて、GPSCに携わっていただいた先生方、子どもたちに心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。